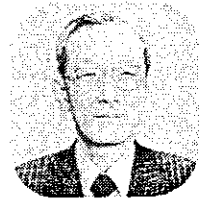


教師は保育に苦勞している



日本学術振興会理事長

木田 宏

去る五月下旬、旅先の広島で開いた新聞に全教連の研究成果が大きく報ぜられていた。それは「学習到達度・進路指導の改善に関する調査」の結果であり、福島で開催された研究大会で発表されたもののように記されていた。それは全国教育研究所連盟が六年間続けてきた「学習到達度・進路選択に関する基礎的研究」の一環として行われたものであり、その研究の呼び掛け、組織、展開に係わった者として、感慨一際深いものがあった。

新聞は、小中高校の教師約二万人の寄せた各種の回答のうち、「教師がみた学習目標の達成度」に専ら着目して、いずれの学校段階でも大多数の教師は、子供たちの半数しか学習目標を達成していないと見ていることを大きく報じていた。その調査は昭和四十五年度との比較もとれていたもので、注目を集めたと思われるのであるが、予備的な集計の段階から、私が興味をよせた項目は、「学校時代に身につけさせたい特性」という項目であった。それは新聞に記されていないから、ここで紹介してみよう。

小中高校のいずれの教師も、学校時代に身につけさせたい特性の第一に「体力」を挙げている。小学校教師の場合は、次いで、「思いやり」、「忍耐力」、「創造性」、「教科の基礎基本」と

続き、中学校の教師は、「忍耐力」、「思いやり」、「教科の基礎基本」、「礼儀作法」をあげている。高校の教師は「忍耐力」、「教科の基礎基本」、「礼儀作法」、「創造性」と続けている。教師の年齢によっても、重点の置き方に違いが見えているが、「体力」が最も重視されていることは、共通している。

教師たちのこの回答から、その苦勞が忍ばれるように思うのである。即ち、教師は、保育に力を注いでいると思われからである。体力を始め、教科の基礎基本以外の諸項目は、本来ならば家庭教育の課題であり、学校は教科を指導するところである筈であるが、高校においても、なお、忍耐力が教科以上に教師の関心事となっていることは、どう受け止めたらよいであろうか。

この調査結果の示す所に、今日の教育問題の根源的な原因があると思うのであるが、いかがであろうか。そうとすれば、教育改革で措置すべきことは、現象にたいする表面的な対応だけではなく、根源を改める総合的な方策が工夫されなければならぬ。

それはともかく、全教連の活動が注目されたことを心から喜んでいるところである。